

今、「千載一遇のチャンス」、 そんなふうにつえられるかどうか？

志ネットワーク代表 上甲 晃

夏休みで自宅に帰ってきた孫娘。大学四年生である。「大学生活のうちの後半の二年間は、ほとんど大学の構内に足を踏み入れたことがない。学生食堂に行った回数も数えるほど」と言っているのを横で聞いていて、コロナ禍のためとはいえ、かわいそうにも思う。

コロナ禍は、私達の様々な楽しみやチャンスを奪ってしまっていることは事実である。例えば、甲子園の土を踏むことを断念せざるを得なかった高校球児、オリンピックの入場式を目の当たりにできると楽しみにしていた人、大勢の人達に祝福される結婚式を楽しみにしていたカップル。挙げればきりのないぐらい、人々の楽しみや生きがい、チャンスが奪い去られた。

「新しく生まれ変わる、絶好の機会

コロナ禍は、まことに不幸な出来事である。しかし、実は、コロナ禍は、様々な意味において、「生まれ変わりのチャンス、であることも事実だ。

一年半ほど前、私は、コロナ禍に遭遇した時、「志さえあれば、あらゆる困難はチャンスである」という松下幸之助の教えを、まず肝に銘じた。このコロナ禍もまた、「志があるならば」、今までのやり方を全面的に見直して、新しいやり方、方法を生み出して、「生まれ変わる。ための得難いチャンスであると考えた。

日本の国全体が仮にそのような思いに立つことができていたならば、まったく今と異なる取り組みや動きが起きていたのではないだろうか。

将来に備えて果敢に布石を打っているか？

「今までのようにいかない」と頭を抱えている大半の経営者。頭を抱えるほどに、「早く元のようにならないか」と待つばかりだ。そして、待つ時間が長くなればなるほど、元のことさえ、だんだんと忘れてきてしまう。滅びの道だ。今は、「これからのあり方を懸命に読み、それに必要な準備のチャンスである」。社員みんなで懸命に頭を振り絞って、「この仕事は将来どのようなになるだろうか」と読む。そして新しい分野開拓の道筋を考えて準備する最高のチャンスだ。こんな機会でもなければ、日々の忙しさにかまけて、未来に対する準備や投資など全く手を付けられなかったことだろう。

例えばレストラン。休業補償をもらって店を閉めている時、将来の経営格差が生まれるのだ。ただ単に店を閉めて、のんびり休ませてもらおうかと考えているようでは、コロナ収束の後の未来はない。

この機会に、新しいメニューを開発しようではないか。そしていつでもすぐに提供できるように、しっかりと訓練しておこうなどと前向きに考えられるところは、未来に明るい光を見ることが出来る。皮肉な言い方をすれば、コロナウイルスは、その経営力が本物かどうかを確かめているとも言えよう。

あらゆる進歩発展は困難の時に生まれる

人類の進歩発展は、すべて逆境の時に生まれていることを歴史的な事実として心得ておかなければならない。平和で取り立て困難なこともなくすべてが順調に進んで

いる時、人間は、「これを何とかしなければならぬ」と真剣に考えることは絶対にない。今が安定し順調であればあるほど、人間の心理は、「このまま続いて欲しい」と思うものだ。「このまま続いて欲しい」とみんなが考えている時に、かつてない方法や考え方は生まれてこない。

危機感が強ければ強いほど、「何とかしなければならぬ」と人は思う。その「何とかしなければならぬ」と考えること自体が、次なる発展の原動力になる。コロナ禍であらゆる活動が制約を受けているこの極めて困難な時こそ、次なる飛躍への大チャンスである。経営者ならば、まさに今はそういう時であることに気付かなければならぬ。

〆無為、は愚策である

このところの日本の様子を見ていると、「何もしない」ことが一番の方策のように思い込んでいる節がある。しかし、〆無為、は、愚策、社会を亡ぼす思考である。

例えば大学教育を一例として取り上げてみたい。「大学生達に、他人を思いやる心をしっかりと植え付け、公共心を教育する得難い機会である」との志を持つならば、「大学の授業は通常通り対面で行います。但し、みなさんの課題は、大学の中からいっさい感染者を出さないためにいかにすればいいかをみんなで徹底して研究、実践し、広く社会に発表して、コロナ感染を防ぐために貢献すること」といった道も出てくる。

コロナ禍の忌まわしい事態に対してじっと耐えている姿から得られるものは、忍耐力ぐらいしかない。逆に、人々から生きる意欲を奪っていくことを恐れる。学生達の若い英知を寄せ集め、「私達の努力で、この困難を果敢に乗り越える知恵を社会に提供する」ことは、〆最高の生きた教育、になるのではないか。

嵐に耐える人は嵐の中でしか育てられない

昨今のコロナ対策は、〆無為、を国民に押し付けるばかりの無策だ。コロナ禍を最大に生かす英知をかき立てる



佐渡の夕陽を臨む（新潟市）

発想が求められる。私は、その思いを貫き、『青年塾』活動に取り組んでいる。今こそ、〆生きた人間教育、の最高のチャンスだ。「嵐に耐える人は嵐の中でしか育たない」。

私は、このコロナ禍に、いくつかの自らに言い聞かせる言葉を考えて、自分自分の勇気を奮い立たせてきた。多くは松下幸之助発言集を読破することを通じて、思い付いた言葉だ。

■「腹をくくれ」

とかく頭で考えると理屈ばかりが先行して、不安感にかられる。こういう時は、〆じたばたしない、と腹をくくることが先決だ。

■「困って困らず」

困った時に困り切ると、途方に暮れてしまう。どんなに困ったことになっても、「見方を変えたらチャンス到来」と考えてきた。

■「備えるべきは備え、やるべきことはやる」

むやみやたらと恐れてしまって、やるべきこともやらない人が多い。やらなければどんどん衰退していく。やるべきことはやるから知恵が生まれる。

■「この瞬間に命懸け」

コロナが収束したらと考えたら、コロナ感染におののく今日という日の値打ちがなくなる。常に今日が命の確かな瞬間だ。今日を命懸けで生きる。

■「生きた学びの大チャンス」

平時に危機管理の生きた学びはできない。危機に備える生きた学びは、危機の真ただ中でしかできない。